

「窓」から見た世界

高成田 享

2008 年 1 月

「この記事の裏には、どんなことがあるのか」。新聞記者はよく聞かれる質問ですが、実はこんな裏がありまして、とは言えないものがほとんどだと思います。とはいえ、コラムなどは、「裏」を語っても、さしつかえのないことが多いように思います。そこで、論説委員を「卒業」して、東北の小都市で「地方記者」になったのを機に、論説時代に書いた「窓」という夕刊のコラムの一部について、記事を参考資料に使いながら、記事の背景などを語ってみたいと思います。

ということで、あらためて、私の「窓」を2年ほどさかのぼって読み直してみると、凡庸な文章ですが、地域とか個人とかの視点を大事にしながら、世の中を見ようという気持ちが出ているように思いました。そういう意味では、いまの「地方記者」の仕事は「社説」というよりも、「窓」の延長線上にあるようにも思います。

コラムは、日々のニュースから距離を置いたものが多いので、「賞味期限」がまだあるものもあると思います。題名と背景説明を見て、ご興味をもたれたものがあれば、お読みいただければ幸いです。

● 「新約聖書」を全訳する (2008年1月5日)

・個人で新約を訳そうという大仕事に取り組んでいる田川建三さんの話。学生時代からお目にかかりたいと願っていた思想家で、9・11とヨハネの黙示録というテーマで5年前にお話をうかがった。西宮駅近くの喫茶店で、時のたつのも忘れて聞いた話のさわりの部分です。

● なきゃわきゃまーじん (07年11月28日)

・奄美大島で開かれた琉球の自治を考えるシンポへの参加記。議論も楽しかったけれど、バブルの波にさらされずにいた奄美の美しさに感動しました。あれから、焼酎は「黒糖」にしています。

● 沖縄の紅茶物語 (07年11月15日)

・沖縄の友人から送ってもらった「琉球紅茶」がおいしかったので、現地視察。沖縄の

風土とすぐれたブレンダーとのミックスが味覚の秘密でした。ビジネスとしての成功を期待したいと思います。

● **榎本武揚と国益 (07年10月31日)**

・ひょんなことで知り合いになった榎本武揚のひ孫隆光さんが主催する「武揚100回忌」の出席記。08年は没後100年ということで、いろいろな行事が企画されている。武揚再評価の本の出版計画もあり、私も参画しています。

● **台湾の受難 (07年8月24日)**

・夏休みで行った台湾旅行の土産話。

● **トウモロコシ天狗 (07年7月25日)**

・館を旅行した折に訪ねた農家の東京進出記。ともかくこの農家がつくるトウモロコシは甘い。その味覚は06年8月1日の「トウモロコシの経済学」で紹介した。

● **歴史の捏造 (07年7月14日)**

・「黒いアテナ」は以前から面白い話だと思っていましたが、その訳者のひとりにたまたま会えたので、日本の教科書問題とからめて書いてみました。

● **米国の対中戦略 (07年4月27日)**

・ワシントン勤務のときに知り合った渡部恒雄さんの著書を紹介。シンクタンクのCSISで鍛えた国際感覚が頼もしいと思いました。

● **ミツバチの異変 (07年3月17日)**

・山形県の朝日連峰のふとこで、蜜蝋をつくっている安藤竜二さんの話から生まれたニュース。蜜蝋の工房で聞くミツバチの物語はいつも示唆に富んでいます。

● **アーサー・シュレジンジャー (07年3月3日)**

・ケネディ政権の頭脳だったシュレジンジャーの追悼記。シュレジンジャー、ブレジンスキー、ベーカー、スコウクロフト……。米大統領には名補佐官がつきものですが、ブッシュ政権のライスさんはちょっと迫力不足でしたね。

● **マザーグースと政治 (07年2月27日)**

・米映画「オール・ザ・キングスメン」を観ての感想記。アクション映画も楽しいけれど、重厚な映画を観ると、何か書きたくなります。なかなか、そういう気にさせてくれる映画が少ないのが残念です。

● **コンプライアンス (07年2月9日)**

・談合問題などで、検事として、行政官として、学者として法律と現実との落差に対峙してきた郷原信郎さんの著書を紹介。郷原さんの話はいつも示唆に富むと同時に、メディアの盲点をついていて、ドキッとします。

● **消防団ミュージカル (07年1月5日)**

・ご存じの「劇団ふるさときゃらばん」のミュージカル観劇記。地方の視点から世の中のおかしさを批判する。しかも、それが絶望ではなく、希望につながる場所がこの劇団の強さです。

● **アウトサイダーアート (06年12月18日)**

・美術の教育を受けていない人が描いた美術。初めて聞いた名前でしたが、その日本への定着と世界への発信を進める今中博之さんの話をうかがって、面白い分野だと思いました。東京・電通での美術展開催に続いて、大阪で本格的なアトリエを出されたそうです。見に行きたいです。

● **薄氷の上のダンス (06年12月15日)**

・著名なエコノミスト、武者陵司さんの強気論を紹介。07年後半からは例のサブプライムローン問題で、弱気派がふえてきたようですが、武者さんは強気を貫いているようです。07年には『新帝国主義論—この繁栄はいつまで続くか』も、論争的な本でした。

● **失われる「用の美」 (06年11月30日)**

・ヴィトンのもの入れがいともたやすく壊れたことにながかりして、書いてしまった。用が美をもたらしているのは確かですが、美を重視しすぎて、用を忘れる倒錯現象がはびこるようになると、そのブランド力も衰えます。

● **ホワイトハウスの職人 (06年11月13日)**

・ワシントン取材したことのある記者としては、たまらなく面白い同名の新書の紹介。金正日に仕えていた寿司職人の本も面白かったけれど、職人さんはいろいろな秘密を握っているのでしょうね。

● **ソロスの言葉 (06年11月6日)**

・投資家ソロスの迫力のかいま見るインタビューをした印象記。08年の米大統領選では、ヒラリーではなくオバマを支援しているとか。現実的な投資家に理想家が同居しているようで、複雑な人物です。

● **飲酒運転を抑えるには (06年9月19日)**

・飲酒運転を減らすためのアイデアのひとつを紹介。大手自動車メーカーからの引き合いもあったようですが、ユーザーの便益を優先するメーカーの意欲はいまひとつのようです。

● **米国でもらった食の問題 (06年9月9日)**

・食の安全については、どこの国の消費者にとっても大きな関心事でしょうが、それぞれの国によって、温度差があるようです。

● **マカオ最新事情 (06年8月11日)**

・ラスベガスを抜くギャンブル都市にのし上がろうというマカオの旅行記。カジノの様子を見ていると、お客の中心である中国人は、家族で楽しむことよりも賭博に熱中しているようでした。

● **トウモロコシの経済学 (06年8月1日)**

・ハルビン産と函館産のトウモロコシ。比べるまでもないけれど、ハルビンにもそれなりのおいしさがあると思います。

● **「渡し」にはドラマがある (06年7月6日)**

・音楽会の会場で偶然に見た光景から、「渡し」をめぐるドラマを知りました。記事にしたおかげで、「渡し」をめぐる人々で会ができました。「窓」が縁なので、その名も「同窓会」。私も入っています。

● **セレンディピティ (06年5月24日)**

・よしだみどりさんの翻訳した同名の本で初めてこの言葉を知りました。いまでは、新聞を読まないという若い人には、必ずこの言葉を説明し、新聞を読むと、まさにセレンディピティの体験をずっと言っています。

● **DEN構想 (06年4月14日)**

・米経済学者のプレストウィッツ氏が来日した折に、話をうかがいました。ドルと円との「結婚」を説く同氏の話は、これからもっと現実味をおびるような気がします。

● **相利共生 (06年4月3日)**

・日本の規制緩和は米国の差し金というのが「常識」になっていますが、ちょっと米国を買いかぶっているような気がします。在日米国商工会議所会頭のレイクさんの努力を見ると、その感を強めます。

● **ブッシュ大統領にまた難題 (06年2月17日)**

・米国のチェイニー副大統領が狩猟で友人を誤射した事件について、論評しました。「難題」だったはずで、その後、副大統領が泥酔していたことも明らかになりましたが、副大統領にはまるでこたえなかったようです。

● **黒字が日本経済を殺す (06年1月12日)**

・日本が貿易でかせいだドルを使わず貯め込んでいることが、米国を助けているだけでならまだしも、日本を豊かさから遠ざけている。三國陽夫さんの論理は明快で、事実もそれを立証しているように見えます。

● **いなか暮らしのコツ (05年11月30日)**

・「いなか暮らし」にあこがれて、山形県西川町で話を聞いていたら、「都会で暮らす能力がないと、いなかでもうまく暮らせない」と言われました。自戒の言葉にしています。

●「戦陣訓」の呪縛

・米 국무省OBのストラウスさんが捕虜になった日本兵の話が聞きたいというので、お手伝いをしたことがあります。その研究が本になり、日本語にも訳されました。戦陣訓の痛々しい重みがよくわかる本です。

高成田享 (たかなりた・とおる)

1948年岡山市生まれ。東京大学経済学部卒業。71年に朝日新聞社に入り、山形、静岡支局を経て経済部記者。アメリカ総局員(ワシントン)、経済部次長、論説委員などを経験。96年から97年までは、テレビ朝日「ニュースステーション」コメンテーターも兼ねた。98年から2002年まではアメリカ総局長(ワシントン)。帰国後、論説委員に戻り、米州、国際経済などを担当。08年1月から石巻支局長。

朝日新聞のウェブページ「アスパラクラブ」の「ブログaサロン」で、毎週「ニュースdrag」という時事コラムを執筆している。共愛学園前橋国際大学客員教授、専修大学・立教大学非常勤講師。財務省関税・外国為替等審議会委員。主な著書に『ディズニーランドの経済学』(共著)、『ワシントン特派員の小さな冒険』、『怒りの青さまた苦さ』、『アメリカの風』、『アメリカ解体全書』(共著)な

参考 資料

朝日新聞 2008年1月5日 夕刊 2ページ 東京本社

窓 論説委員室から		新約聖書を全訳する
聖書学者で思想家としても知られる田川 建(たけ)さんが新約聖書の全訳に取り組んでいる。その最初の配本である「パウロ書簡その一」(作品社)の序文に、聖書翻訳の土台となる古代ギリシア語の語学力についてこう書かれていた。「辛うじて及第点に到達したかな、と思えるようになったのは、六十歳代も半ばになつてから」 ことし選勝を迎えた我が身としては、人生これからだと勇気づけられる言葉だ。そこで、話をうかがいに行った。 「昔は意味がわからずつかえていた部分です」と訳せたりして、語学は蓄積です」と言う。それにしても、6巻に分けた翻訳が完成するのは13年末とのこと、年齢を考えると大決断に思える。「新約の概論を書くつもりだったのですが、既存の翻訳は、日本語としてへんだつたり、無理な解釈をしたりしている箇所が多い。そこで、概論を後回しにして、自分で訳すことにしました。時間との勝負ですね」 翻訳といっても、本文の6倍もの注が付いているので、この巻だけで5700字の大著。注には「自分を相手よりもはるかに偉い存在だと思いがちになるパウロらがいかにも驕慢ににじみ出ている」なんてくたりが出てくるから、教典ではなく書物として聖書を読むには、とても面白い。 「パウロだってイエスだって生身の人間だったのだから」と笑う。次回の配本は今年6月の予定で、マルコとマタイ福音書のこと。田川さんの手には推敲を重ねる草稿がもう握られていた。 〈高成田享〉	「コンクリートの護岸堤ができたために、アタンの林の向こうに砂浜と海が広がる風景が見られなくなった」 「コンクリートを批判するのはたやすいが、それではどうやって生きていくのか、知恵を出さなければ、島の自然を守ることが難しい」 奄美大島の南部、宇検村にある平田という小さな集落で開かれた「ゆいまーる・琉球の『自治』万人のもあい」の集会に参加したら、開発の象徴とも言えるコンクリートをめぐって、激しいやりとりが交わされていた。 沖縄ほどには開発の波が押し寄せていない奄美は、まだまだ美しい自然が残されている。しかし、島の主産業で、織り機のある農家の生計を助けてきた大島紬の需要が減り、それに代わる黒糖焼酎やマグロの養殖だけでは、若者を島につなぎとめることが難しくなっている。どの地域も過疎と高齢化の悩みを抱えている。 しかし、奄美の特産品をインターネットの「@やちやば」で販売している前田守さん(35)、地域FM局をNPOで運営している藤澤吾さん(36)らの報告を聞いて、地域の強みを生かす知恵が泉のようにわき出ていると思うようになった。 「なきやわきやまーじん、きはりんしょうろ」。こんな言葉が会場から出た。あなたも私も一緒に、気張りますよ、という意味だという。 奄美や沖縄でユイメールと呼ぶ相互扶助の精神は健在だ。 〈高成田享〉	

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年11月28日 夕刊 2ページ 東京本社

窓 論説委員室から		なきやわきやまーじん
「コンクリートの護岸堤ができたために、アタンの林の向こうに砂浜と海が広がる風景が見られなくなった」 「コンクリートを批判するのはたやすいが、それではどうやって生きていくのか、知恵を出さなければ、島の自然を守ることが難しい」 奄美大島の南部、宇検村にある平田という小さな集落で開かれた「ゆいまーる・琉球の『自治』万人のもあい」の集会に参加したら、開発の象徴とも言えるコンクリートをめぐって、激しいやりとりが交わされていた。 沖縄ほどには開発の波が押し寄せていない奄美は、まだまだ美しい自然が残されている。しかし、島の主産業で、織り機のある農家の生計を助けてきた大島紬の需要が減り、それに代わる黒糖焼酎やマグロの養殖だけでは、若者を島につなぎとめることが難しくなっている。どの地域も過疎と高齢化の悩みを抱えている。 しかし、奄美の特産品をインターネットの「@やちやば」で販売している前田守さん(35)、地域FM局をNPOで運営している藤澤吾さん(36)らの報告を聞いて、地域の強みを生かす知恵が泉のようにわき出ていると思うようになった。 「なきやわきやまーじん、きはりんしょうろ」。こんな言葉が会場から出た。あなたも私も一緒に、気張りますよ、という意味だという。 奄美や沖縄でユイメールと呼ぶ相互扶助の精神は健在だ。 〈高成田享〉	「コンクリートの護岸堤ができたために、アタンの林の向こうに砂浜と海が広がる風景が見られなくなった」 「コンクリートを批判するのはたやすいが、それではどうやって生きていくのか、知恵を出さなければ、島の自然を守ることが難しい」 奄美大島の南部、宇検村にある平田という小さな集落で開かれた「ゆいまーる・琉球の『自治』万人のもあい」の集会に参加したら、開発の象徴とも言えるコンクリートをめぐって、激しいやりとりが交わされていた。 沖縄ほどには開発の波が押し寄せていない奄美は、まだまだ美しい自然が残されている。しかし、島の主産業で、織り機のある農家の生計を助けてきた大島紬の需要が減り、それに代わる黒糖焼酎やマグロの養殖だけでは、若者を島につなぎとめることが難しくなっている。どの地域も過疎と高齢化の悩みを抱えている。 しかし、奄美の特産品をインターネットの「@やちやば」で販売している前田守さん(35)、地域FM局をNPOで運営している藤澤吾さん(36)らの報告を聞いて、地域の強みを生かす知恵が泉のようにわき出ていると思うようになった。 「なきやわきやまーじん、きはりんしょうろ」。こんな言葉が会場から出た。あなたも私も一緒に、気張りますよ、という意味だという。 奄美や沖縄でユイメールと呼ぶ相互扶助の精神は健在だ。 〈高成田享〉	

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年11月15日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

沖縄の紅茶物語

友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。というのも、明治時代から主に輸出用に生産された日本製の紅茶は、インドやセイロン（現スリランカ）に価格でも品質でも勝てず、国内の産地はほとんどなくなっていたからだ。

沖縄を旅した折に、「琉球紅茶」の名前で2年前から製造・販売している沖縄ティーファクトリー（本社・沖縄県うるま市）の代表、今本智子さん（42）を訪ねた。スリランカで茶園を営んだ経験のある今本さんが沖縄に目をつけたのは「この赤い土を見たときに、スリランカの土と同じだと思ったから」と言う。

そこで、かつて紅茶を生産していた地域を調べて、「べにほまれ」などの紅茶品種が残っているのをさがして、それをベイスに香りの強い中国産などをブレンドしたところ、自信作ができたという。

そんな紅茶物語に魅了されて、町おこしにつなげようというのが沖縄本島の基地の町、金武町だ。今本さんの指導で、農業・食品産業技術総合研究機構の沖縄茶業研究拠点（鹿児島県枕崎市）にある「べにほまれ」の純粋種を試験的に移植した。

「サトウキビしか育たないと思っていた赤土が紅茶にも適している。その利点を生かしたい」と、町は期待を寄せる。2千本の苗木が育つ試験茶園では、来年から茶摘みができるという。将来は茶園を広げ、紅茶工場も地元にと夢を膨らませる。

地の利と人の知恵をうまく生かせるか、これからが正念場だ。
〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年10月31日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

榎本武揚と国益

明治新政府に抵抗した箱館戦争で敗れて投獄された榎本武揚（1836～1908年）は、獄中で書いた文書に「君恩に未だ報いず」と記した。

幕府の留学生として欧州に学びながら、近代化の道を歩む日本に、その知識を役立たせられないのを悔やんだのだ。

「その『君恩』という言葉の横に、ルビをふるように『国益』あるいは『国為』と書いてあるのです。死を覚悟していた武揚にとっては、幕府も新政府もなく、日本の国益だけがあったのでしょう」

先日、東京都文京区の吉祥寺で営まれた武揚の百回忌に参列したとき、ひ孫にあたる榎本隆充さん（72）から以前こんな話をうかがったのを思い出した。

その知識と才能を惜しまれ罪を赦された武揚は、国際法に詳しいことを見込まれて、初代の駐露特命全權公使として1887年にサンクトペテルブルクへ赴き、樺太・千島交換条約の締結に尽くす。

その後、通信相、文部相、農商務相などを歴任し、西欧の技術を導入して産業を発展させる殖産興業の政策を支えた。幕臣出身ではめずらしい子爵にもなった。

これについては、徳川と明治の二君に仕えて、やせ我慢ができなかった、と福沢諭吉から批判されるおまけもついた。

国益よりも私益に走る役人が絶えないこのころでもある。時の政権を超えた国益に尽きたのか、それともやせ我慢ができなかったのか。没後百年を迎える武揚の再評価が必要だろう。
〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年8月24日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

台湾の受難

夏休みに台湾旅行をしたばかりだったので、中華航空機の炎上事故は、とてもひとつには思えなかった。台湾のイメージも悪くならないかと心配だ。

「台湾の経済は元気ありません」18世紀から19世紀にかけて貿易港として栄えた鹿港という町を訪ねたときに、ガイドの女性が嘆いていた。「アジアのドラゴンと呼ばれた韓国、台湾、香港、シンガポールのなかで、最近台湾の成長がもっとも低いのです」

名所旧跡だけでなく経済にも詳しいと思つたら、数年前まで台湾の繊維専門の商社で働いていたという。「台湾で縫製したアパレル製品を日本に輸出していたのですが、中国本土には勝てなくなり、会社も大陸に移ってしまい、失業しました」

台湾は、繊維やプラスチック加工、半導体などの製造業を中心に、80年代から90年代にかけて、アジアの新興工業地域（NIEs）を先導してきた。ところが、新世紀に入って、製造拠点を中国に移す企業がふえ、産業の空洞化が急速に進んでいる。成長率や失業率などは「4匹の竜」のなかで、どれも悪いほうだ。

鹿港では、航海の安全の女神といわれる「媽祖」をまつる「天后宮」に参拝した。中国から台湾、沖縄を経て日本列島を結ぶ大きな弧は、かつては物流や文化の動脈で、この地域の媽祖信仰も厚かった。

これからも東アジアの発展には、この弧を生かすことが大切だ。空路にも媽祖さんの加護を期待したい。
〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年7月25日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

トウモロコシ天狗

自分の育てた作物がいちばんおいしい。そう自慢する天狗たちが、この産地にも作物にも必ずいる。それが日本農業の質を支えてきた。

北海道森町で100年の農園を経営する明井正元さん(55)は、トウモロコシの天狗だ。夜明けにはもう畑にいて、葉についた朝露の状態をみて、水のまき方などを考える。北海道駒ケ岳のふもとにある明井さんの畑で、収穫前のトウモロコシを見せてもらった。一つひとつの実に目が当たるように、影をつくりそうな葉を落とすなど、そのこだわりは、農家というよりは芸術家のようだった。

「昨年のものは糖度が20度にならなかったが、今年はさらに工夫を重ねて22度になった」という。トウモロコシで20度を超すのは難しいといわれているので、栽培の技術に一段と磨きがかかったようだ。

明井さんの長年の夢は、自慢のトウモロコシを味にうるさい東京の消費者に味わってもらうことだった。それが今夏は実現する。生で食べられるほど甘い「味来」という品種を空輸して、観光客の多い土曜日に中央区築地4丁目の青果店の軒先で販売する経路ができたのだ。

先週の試験販売では、生で食べられるというお客の驚きもあって、2時間足らずで用意した300本が売り切れた。贈答用などの注文も取れたそうで、今週末は、もっと持ち込む本数をふやすという。

この夏は、天狗の鼻がさらに高くなりそうだ。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年7月14日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

歴史の捏造

「現在の自分たちを理想化しすぎると、過去を美化して、歴史を捏造していくことになります」

そう警鐘を鳴らすのは、立命館大学などで国際文化論を教える、現在は「グローバルネットワーク21」というNPOの代表を務めている片岡幸彦さんだ。

片岡さんが監訳し、出版されたマーティン・パナール著「ブラック・アテナ」第1巻(新評論)は、ギリシャ文明がエジプトやフェニキアから学んだものを基礎にし、その元をたどればアジア・アフリカになる混成文化だと論証する。白人のアーリア人がつくったという「近代のギリシャ像」は「歴史の捏造」ということになる。

産業革命で世界的に優位に立った近代ヨーロッパが、自分たちの心のふるさととするギリシャ文明から、古代エジプトなどの影響を排除した。捏造の意図を分析すると、「最近の日本における歴史の修正にもつながるものがあります」と片岡さん。

たしかに、日本史の教科書検定で、沖縄戦の集団自決についての記述から日本軍の関与が削除されるなど、このところの「歴史の修正」の背景には、「美しい国」をめざすあまり、過去を美化したり、正当化したりする潮流があるのかもしれない。

パナールはこの著書で「クレオパトラは黒かったのか」といった論議を世界に巻き起こす一方で、第2巻(藤原書店刊)「黒いアテナ(上下)」で、論議を深めている。いずれも大著だが、ここの夏休みには格好の「課題図書」だろう。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年4月27日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

米国の対中戦略

米国の中国に対する姿勢は読みにくい。軍事の拡大や通貨・元の安値には厳しい姿勢を見せる一方、6者協議では北朝鮮の抑え役として頼み、米中の戦略経済対話では相互関係を深めている。

そんな複雑な関係を解きほぐしているのが、三井物産戦略研究所の渡部恒雄主任研究員の近著「今のアメリカ」がわかる本(三笠書房、知的生きかた文庫)だ。

渡部さんは、米国のシンクタンクにいた経験を生かしながら、米国の対中戦略を安保と経済の組み合わせで分析する。

中国の経済にも安保にも懸念を持つのがチェイニー副大統領らの「対中封じ込め派」。経済は懸念するが安保は協力というのがペロシ下院議長らの「経済リベラル・人権派」。経済も安保も協調というのがポールソン財務長官らの「対中経済推進派」。経済は協調しても安保には懸念というのがアーミテージ元国務副長官らの「日米同盟派」となる。

なるほど、こう分類すると、対中政策に影響力を持つ人々のせめぎあいが見えてくる。いまは中国を「責任ある利害関係者」として、経済や安保で国際社会に参与させるという考え方で各派は妥協している。しかし、これは対中融和ではなく、将来の対決の可能性を残す、と渡部さん。

米議会の主導権を民主党が握ったのは、米国の重心を経済懸念の方向にずらせるかもしれない。最近、米国が知的財産権で中国を世界貿易機関(WTO)に提訴したのは、その表れか。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年3月17日 夕刊 3ページ 東京本社



論説委員室から

ミツバチの異変

米国の各地で大量のミツバチが消え、蜂蜜の生産だけでなく、ミツバチの授粉に頼る果実の収穫にも不安が出ている。

そんな記事を見て、山形県朝日町で養蜂を作る工房「ハチ蜜の森キャンダル」を営む安藤竜二さんの話を思い出した。

昨年の採蜜シーズンは、ミツバチを食べる天敵のキイロスズメバチがほとんど襲来しなかった。それだけなら養蜂業には、ありがたい話なのだが、肝心のミツバチも例年になく減り方だった。

あらためて尋ねてみると、「米国でも異変だと聞いて驚いた。日本の場合、昨冬の大雪のためかもしれないが、近頃、農家の高齢化が進んでいるせいでも、残留性の高い農薬が使われ始めたのも影響しているのではないか」と語る。

専門家はこう見ているのか。玉川大学ミツバチ科学研究施設の中村純・助教授に聞いてみると――。

「米国の原因は、天候の異変や巣を頻繁に移すなどの複合的な要因が重なり、ミツバチがストレスで巣から逃げ出したのではない。国内でも岩手県などで異変が起きているが、これは新しい農薬がたまたまハチにも打撃を与えたようだ」

日米の原因は同じではないかもしれないが、ハチにとって受難であることに違いはない。人間の行動が影響しているとすれば、手だてを考えなければならぬ。

春の訪れで、採蜜も本格化する。今シーズンのミツバチと蜂蜜はどうなるのか、とても気になる。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年3月3日 夕刊 3ページ 東京本社



論説委員室から

アーサー・シュレジンジャー

ケネディ大統領の特別補佐官として知られる歴史学者のアーサー・シュレジンジャー氏が89が亡くなった。

歴史的な視点と生きた政治にかかわった経験から、米国の政治についての語り口には、いつも説得力があった。それを裏打ちしたのが、米中央情報局（CIA）の仕掛けたキューバ侵襲計画やベトナムへの本格介入など、ケネディ時代の失敗から学ぶという謙虚な姿勢だった。

歴史学者の家庭に育ち、本人も最後まで現役という意志があったのだろう。執筆活動を続け、研究会などでは、お決まりの蝶ネクタイ姿で話したり、質問したりする姿があった。

04年に著した「アメリカ大統領と戦争」は、イラク戦争をはじめたブッシュ大統領の決断を、米国の政治史のなかで検証したもの。イラクがベトナム戦争のくり返しになることを心配するとともに、歴史から学ばない「帝制的大統領」が出てくるようでは、民主主義に未来はないという、強い危機感にあふれていた。

今年の元日、ニューヨーク・タイムズ紙への寄稿では、「米国は全知全能ではないし、世界のあらゆる問題を米国流に解決することはできない」と語ったケネディを思い起こしながら、「歴史は、全知全能という思いこみへの最善の策だ」と書いた。

これは、中東の民主化が米国の使命だという思いこみでイラクに侵襲したブッシュ政権に、謙虚さを求める「遺言」となったのではないか。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年2月27日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

マザーグースと政治

ハンプティ・ダンブティ嬢の上ハンプティ・ダンブティ落っこちた／王様の馬みんなでも、王様の家臣みんなでも／ハンプティを元には戻せない――

支持率が高みから落っこちた日米の政権を見ていると、英国の童歌マザーグースのひとつが口に出してきた。

側近たちがあの手この手で人気を取り戻そうとしても、ちっともうまくいかないところは、あの童歌そっくりだ。

それにしても、この歌詞はいつの時代も政治的な寓話となるようで、1947年のピューリッツァー賞を受賞したロバート・ウォーレンの小説「オール・ザ・キングスメン」（白水社刊「すべて王の臣」）や、ニクソン米大統領が辞任に追い込まれたウォーターゲート事件を描いた「オール・ザ・プレジデントメン」（文芸春秋刊「大統領の陰謀」）の題名はこの一節を借用した。ウォーレンの小説は、大恐慌の時代に大衆の人気取り政策でルイジアナ州知事や上院議員を務め、大統領をめざしたヒュー・ロングに着想を得た。昨今の政治がポピュリズムだといわれるなかでは、こちらのほうが今日のかもしれない。

この小説が米国で映画化され、日本でも近く公開されるといので、その試写を見た。改革を叫んで知事になったものの、いつのまにか自らも汚職に手を染め、その結末は悲劇となる。どこも同じだ。

そういえば、マザーグースの「10人のインディアン」には、「そして誰もいなくなった」という言葉もあった。（高成田享）

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年2月9日 夕刊 3ページ 東京本社



論説委員室から

コンプライアンス

企業で不祥事が起きる度にコンプライアンスという言葉が出る。「法令順守」と訳されるが、これが誤解を与えていると、桐蔭横浜大学コンプライアンス研究センター長の郷原信郎教授は主張する。近著「法令順守」が日本を滅ぼす(新潮新書)のなかで、コンプライアンスは、組織が社会的な要請に適合することなのに、日本は法令の順守にこだわりすぎていると指摘する。このため、経済の実態にそぐわない形で法令が運用されていても、その改善よりも順守に目を奪われ、かえって経済をゆがめていると見る。

その典型として談合を挙げる。戦後の復興や高度成長の時期には機能したシステムも、いまや弊害ばかりが目につく。だが、価格競争を促すことに偏った独占禁止法の順守が自己目的化するあまり、「総合的に見て、良質かつ安全で安価」であるはずの調達をそこなわれているという。

それではどうしたらよいのか。郷原さんに尋ねると、「それぞれのプロである個人の意欲や倫理観が反映できるようなシステムを、業界や組織が自治という形で築くことが必要」との答えだった。

経済の世界では、検察による一罰百戒だけでは不公平になりかねない。かといって米国のように監視する側もされる側も大勢の職員や弁護士を抱える仕組みが、効率的とも思えない。

「人間としての常識に基づいた新しい日本システムをつくる」という郷原さんの提案を支持したい。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2007年1月5日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

消防団ミュージカル

地域の連帯感を高めるヒントがこんどころにあったのか。そう元気づけられるミュージカルを見た。劇団あさきとさきやらはんの「地震カミナリ火事オヤジ」だ。

地方の小さな「風神平消防団」に集う人々のドラマを通して、地域活動の「最後の砦」となった消防団の実情がわかる筋書きになっている。最後には、その消防団活動を活性化させる「秘策」まで登場して、観客を楽しませる。

「町村合併やら高齢化やらで、地方のやる気がなくなっています。その一方で、大きな自然災害も増えているので、消防団は地域にとって大切な互助組織になっています。ところが、その役割や活動ぶりを理解している人は少ない。そこで応援歌をつくったのです」

ミュージカルの作・演出者であり、83年に旗揚げした劇団の創立メンバーでもある石塚克彦さん(69)の話だ。

江戸時代の町火消しが前身といわれる消防団は、明治から戦前にかけての消防組や警防団の時代を経て、戦後は市町村に属する組織になった。現在の団数は約3千、団員は90万人だという。

団員の減少や高齢化が悩みだが、それを補うように女性の団員がふえ、現在は1万3千人を超えた。

このミュージカルは06年6月の初演から約100回の公演をこなし、今年は200を超える勢いだ。「風神平」以外の消防団も元気になれば、そのネットワークの力で息の長い公演になるだろう。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年12月18日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

アウトサイダーアート

「まず、この言葉を世の中に定着させたい」。大阪市にある知的障害者の授産施設アトリエインカープの施設長、今中博之さんが熱っぽく語り始めた。

「アウトサイダーアート」。本人の障害や、おかれた環境などのために、美術の教育や訓練を受ける機会がなかった人々が作り出す芸術のことだ。

「作者に知的障害者が多いので障害者の芸術とみられることもありますが、障害の有無ではありません。国際的には現代美術を突き抜けた感性が評価されて、新しいジャンルになってきました。欧米では、専門の市場ができています」

いま施設には22人の障害者が通う。今中さんは全員を「アーティスト」と呼んでいる。そのうち5人の作品はすでにニューヨークで取引されている。国内でも芸術として認知されるために、「アウトサイダーアート」という言葉がもっと広まっていってほしいと願う。

4年前に社会福祉法人「素王会」を立ち上げ、アトリエを作った今中さんの夢は「施設から独立して単独でアトリエを持つような人が出てくること。そして、そういう人の作品が海外の美術館に飾られることです」と言う。

5人のなかのひとりである寺尾勝広さん(46)の作品6点が、アートプロデューサー小出由紀子さんの事務所(電話03・5298・7488)で22日まで展示されている。ほんの一端だが、アウトサイダーアートに触れることができる。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年12月15日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

薄氷の上のダンス

年の瀬の話のひとつが翌年の景気見通しだ。下降するとの見立てが多いなかで、ドイツ証券のエコノミスト武者駿司さんは「来年の経済は、日本も世界も絶好調」と超楽観論だった。

「米国や欧州で、高い成長と低い金利という特異な状態が4年も続いている。通常の景気循環を越えて、新しい時代に入ったと見るべきだ」と言う。

それを象徴するのが、中国やインドといった新興経済国の製品が世界を席巻している現象だという。

極端な低賃金で作られた製品の国際市場での取引は、近代経済学が想定するような等価交換でなく、不等価交換となりがちだ。新興国の通貨安もあって、不当な安価で製品が手に入れられる先進国は強い、新興国の企業もその恩恵に浴している。

そうすると、安い労働力を求めて工場が海外に移る空洞化が進みそうだが、先進国、新興国がそれぞれの得意な産業分野を伸ばす棲み分けが進み、相互依存の関係が深まったことで、世界は競争から協調へと変化しているという。

久しく悲観派だった人の見方だけに興味深い。気になるのは、貿易赤字の米国が世界にばらまいたドルの行方だ。「強い米国」の化粧はイラクの失敗ではげつつある。ドルが暴落すれば世界は暗転する。

「いすれ紙くすになるかもしれないが、まだまだ大丈夫」と武者さんは自信たっぷりだ。薄氷の上でも、ダンスは踊れるところか。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年11月30日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

失われる「用の美」

携帯電話を入れているケースが壊れた。ベルトに通すループ部分をとめた糸が切れたのだ。フランスのブランド品だったし、買ってから1年しかたっていないかったの、がっかりした。

修理を頼むときに、「デザインよりも丈夫な実用品ということで、市場の信頼を得てきたブランドだと思つたのに残念だ」と率直な気持ちを言ったら、「おっしゃる通りですね」と反論もなかった。

苦情は聞き流すという接客ノウハウなのだろうが、「品質に自信はある」という言葉を聞きたかった。というのも、これまで使ったこの製品は縫い方が頑丈で、職人の気遣いにあふれていたからだ。

ドイツの名車メーカーは、大衆車も手がけるようになってから、品質が落ちたという評判を聞く。大量生産になったことで、職人のこだわりや技が生きなくなったからだと言われている。

日本の新聞には、連日のように企業のおわび広告が載っている。生産現場での「職人気質」が落ちたための不始末ではないかと思われるものも少なくない。

民営運動を主導した柳宗悦（1889-1961）が「用の美」という言葉を使つたのは、実用品の美しさとともに、作つた職人への賛歌という意味もあった。

ものづくりよりもブランドで売ろうとするれば、やがて「用の美」は消え去り、消費者は逃げる。そんな心配をしなくなる会社だが、世界でも日本でもこのころふえているのが気になる。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年11月13日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

ホワイトハウスの職人

ホワイトハウスのドラマに世界は注目するが、そこに住み込んだり、出入りしたりする職人たちにもドラマがある。

米国在住の韓国人ジャーナリスト、マイケル・ユイ氏の近著「ホワイトハウスの職人たち」（新潮新書）を読んだら、表裏から入らない人々のさまざまな人生が描かれていた。ワシントンに勤務した経験のある私としては、思いもよらなかった世界で、ことのほか面白かった。

本に登場するのは、料理人、華子職人、観光客に説明する学芸員、大統領の理髪師や仕立屋など。なかでも、レーガン大統領や現ブッシュ大統領の理髪師がアフガニスタンの外交官夫人だったのは驚いた。

彼女はソ連の侵攻によって、米国で理容師として働くことになった。縁あってレーガン大統領のもとに行ったら、「ステインガミサイルをアフガニスタン人に与えるのはいいことだと思ふか」と尋ねられた。彼女の答えはイエスで、その半年後、アフガンにミサイルは渡ったのだという。

ジョンソン時代からの仕立屋はフランス出身で、米国に来たものの仕事がなく、公園でホームレスをしていた。それが洋服屋の下働きから始めて、いまではスーツが最低でも4千ドルという成功ぶりだ。

著者が来日した際に話を聞いたら、「天国と地獄を経験した人たちが大統領の周りにいることは、米国のダイナミズムとパワーを感じさせる」と語っていた。

日本の首相官邸に出入りする職人たちのドラマも知りたくなった。

〈高成田享〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年11月6日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

ソロスの言葉

米国の著名な投資家ジョージ・ソロス氏(76)が来日した折にインタビュをしたら、靖国神社の話を始めた。同じ日に、靖国神社とその歴史博物館「遊就館」を訪れたというのだ。

「博物館の説明が歴史をゆがめているのにショックを受けた。日本人の戦争の記憶と、日本に占領されたアジア地域の人々の記憶との違いが大きくなれば、それが今後の対立の原因になる」とソロス氏。

遊就館の説明が太平洋戦争を正当化していると罵る米国人の声は、これまで何度も聞いた。日本と戦い、戦後は友好関係を築いてきた根拠が崩れるからだ。しかし、ソロス氏の心情は異なっているようで、自分の歴史を語り始めた。

祖国のハンガリーがナチス・ドイツに占領された。ユダヤ人だった一家はアウシュビッツに送られるところだったが、父親がそれまでのユダヤ姓をソロスという名前に変えたことで、生き延びた。戦後、祖国はソ連の支配の下に入り、ソロス氏はロンドン留学という形で祖国から逃れ出た。

ナチスやソ連が振りまく幻想と実態との落差の大きさを体験した。「現実とその解釈の間に大きな溝があれば、意図しない悪い結果をもたらす。だから、歴史や現実の誤った解釈には、十分に注意しなければならぬ」と説く。

そして「これは資本市場にもあてはまる」と加えた。そうした落差にこそ投資機会が生まれるというところだろう。すこみのある相場師の言葉だった。(高成田享)

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年9月19日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

飲酒運転を抑えるには

飲酒運転に悩んでいるのは日本だけではない。しかし、日本が厳罰主義で抑え込もうとしているのに対して、欧米で広がり始めているのは、酒を飲んだ人間に車を運転させない技術の導入だ。

米国のニューメキシコなどの州では、飲酒運転で検挙されたドライバーに「インタロック」という装置を取り付けるように命じているという。アルコール検知器と車の起動装置が連結していて、検知器を吹いてOKが出ないと、エンジンがかからない仕組みだ。

スウェーデンでは、自動車メーカーのサーブが同じような「アルコキー」を開発した。政府も商用車から段階的に全車にこうした装置を義務づける方針だという。

日本は遅れている。そう思っているなら、検知器とキーとを組み合わせた道具が商品化されていた。大阪市のタイガーインターナショナルジャパン社が開発した「アイキ」で、価格は2万3千円ほど。

息を吹きかけてロックをはずさないと、キーが差し込めない構造。ウイスキーを一口飲んで試してみたら、たしかに赤ランプがついてロックがはずれなかった。

「チャイルドシートの販売を手がけたことから、飲酒運転を防止する装置をつくらうと思いついた。いま運送会社などで使ってもらっていますが、こうした装置が普及するには、法的な義務づけが必要だと思えます」と、神木宏社長は話す。

万全とはいかないだろうが、せめてこのぐらいの備えは欠かせない。(高成田享)

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年9月9日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

米国でもらった食の宿題

ワシントンで大手スーパー「ジャイアント」を久しぶりにのぞいたら、有機栽培の食品が並んでいるのに驚いた。

02年まで3年間住んでいたときには、有機を目玉にしたスーパーをときどき利用したが、食にうるさい人だけを対象にした専門店という印象だった。安売りのチラシ広告で人を集める大衆スーパーが有機を売るとは思わなかった。商品も野菜だけでなく、コンフレックのような加工食品にも及んでいた。

店のマネジャーは「農業や化学肥料に対する心配があるので、有機野菜への需要が広がっている」と言う。生鮮食品の担当者に聞くと、「ジャガイモのような野菜だと2割ほど高い有機を賣う人の数はまだ少ないが、味覚が大事な果物は、通常のものと同くらいの売り上げを獲っている」ということだった。

食への意識が高まっているのは世界的な傾向だ。だが米国でふしぎだと思うのは、欧州や日本と違って牛海綿状脳症(BSE)や遺伝子組み換え(GM)作物への関心が薄いことだ。

「米国では、BSEの発症例は少ないし、GMではなぐバイテクという言葉を使うのでイメージが悪」と、アメリカ穀物協会のバイテク担当は解説する。

リスクの高さを考えれば、農業の影響はおそれる。BSEやGMまで気にしてはいられないところだろう。日欧と米の消費者の違い、どなたが理にかなっているのか、宿題ができた。(高成田享)

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。



論説委員室から

マカオ最新事情

マカオが変貌していると聞いて、香港から連絡船で1時間の観光地を訪ねた。驚かされたのは、カジノを併設したホテルの建設ラッシュだ。中心街に大型のホテルが数棟できつつあるうえ、あらたに造られた広大な埋め立て地にも、巨大なカジノ付き娯楽施設の建設が進められている。マカオは99年にポルトガルから中国に返還され、香港と同じ「1国2制度」になった。その後、それまで香港資本の1社に与えていたカジノの経営権を広げて、米ラスベガスの大手カジノなども進出した。一方、中国本土からマカオへの出入りが原則自由になったため、大勢の中国人がカジノ目当てに押しかけるようになった。マカオへの年間の観光客は1800万人にもなるが、うち1千万人は中国本土からのお客だという。カジノをのぞくと、現金をチップに換える窓口では、お客のほとんどが人民元を出していた。建設中のホテル群は「南海のバブル」を思わせる。マカオの不動産事情に詳しいユナイテッドワールド証券の中村重人さんは「新しいホテルはミュージカルなどの娯楽施設や大会議場を充実させている。カジノの町を家族連れやコンベンションが入るリゾートに転換できるかがカギ」と言う。世界を動かすのは人民元だとの思いで帰国したら、セミの所まで中国の人民元の呼び方レンミンピ（人民幣）と聞かされた。驚きでも人民元と聞く日かな

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。



論説委員室から

トウモロコシの経済学

函館の友人からトウモロコシが届いた。近郊の農家からもぎたてを手に入れたきたという。「そのまま生で」と、電話口の声はすんでいた。初めての体験なので、おそろおそろかじったら、草の香りのあと口の中に甘みが広がった。それから、さくさくほおばった。トウモロコシ畑に入り込み、好物をむさぼっている馬の気分になった。馬で思い出した。その1週間前、中国東北部のハルビンを訪れた時に、路上で焼いていたトウモロコシを食べた。ばさばさとした粒をかみしめながら、甘くなるのを待った。「まるで飼料だ」と、思わずつぶやいた。ハルビン郊外の農村地帯を回ると、広大なトウモロコシ畑が広がっていた。刈り取ったトウモロコシの茎は干して燃料に使い、葉は家畜の飼料にするという。むだのない作物だと農家のあるじは言っていた。味どころではないのだろう。函館近郊では、がんこおやじが無農薬、有機肥料でおいしさを追求しながら、育てているそうだ。それぞれの持味は価格の違いにも出ている。函館産はハルビン路上のざつと20倍だ。このふたつのトウモロコシを国際市場に並べて、価格と味を比べてもらったらどうだろうか。どちらにも国際競争力がありそうだ。そろそろ日本の農業も守りから攻めに転じる時期ではないか。トウモロコシの経済学から考えてみた。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。



論説委員室から

「渡し」にはドラマがある

東京の音楽会で不思議な光景を見た。ドイツ歌曲を多く作ったカール・レーベの演奏会で、音楽家の佐藤征一郎さんが「渡し」という曲を歌い終わった瞬間、客席にいた老人がすっと立ち上がり、佐藤さんに深々とおじぎをしたのだ。かつて、この渡し船に同乗した友のうち、ひとり静かに、もうひとり戦いの嵐のなかで死んだ。その友を偲んで、3人分の船賃を船頭に払おう。そんな歌だ。50年前の朝日新聞に、この詩の作者を知りたいという投書が載った。それに対して「学生時代に学んだドイツの詩人ウーラントの作品だ」と応え、私訳を添えた人がいた。客席にいた小出健さん(78)だ。小出さんがこの歌曲を知ったのは、投書のいきさつを聞いて、この詩に興味を持った松田昌幸さん(69)からだ。松田さんはウーラントの詩が好きだったこともあり、調べるうちに、この詩がレーベによって作曲されていることを知った。松田さんが日本カール・レーベ協会の代表でもある佐藤さんに連絡をとったことで、音楽会を知り、ふたりとも出席したという。「最初から強烈な印象の詩でした。音楽会では、あらためてじくなった友人たちを思い出しながら聴いていた。自然と立ち上がったしまいました」と小出さん。「この詩を調べるうちに、いろいろな人たちがこの詩にかかわっていることを知りました。たまたま渡しに乗り合わせた旅人たちのようでしょう」と松田さん。「渡し」の話は尽きない。〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年5月24日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

セレンディピティ

ふと手にした絵本から、面白い言葉を知った。エリザベス・J・ホッジス著「セレンディピティ物語」——幸せを招く三人の王子（藤原書店）がそれ。セレンディピティとは「当てにしないものを偶然に発見する能力」と英語の辞書にあった。

セレンディップという国の3人の王子が苦難の旅を続けるうちに、幸運に助けられて、求めていたものを見つけ出す。そんなおとぎ話のもとになって、いろいろな国で物語になっただけでなく、セレンディピティという言葉がひとり旅をするようになった。

科学の世界ではよく使われる言葉で、たとえば英国の細菌学者フレミングが偶然にカビのはえた培養皿からペニシリンを発見したことがその代表例だという。

この本の訳者でもあり、すてきな挿絵も描いているよしだみどりさんに「あなたのセレンディピティは」と尋ねてみた。

「『宝島』の作者スティーブンスンの『子どもの時の園』を翻訳するため、彼の生涯を調べているうちに、彼が吉田松陰の小伝を書いていることを知り、『日本より先に書かれた謎の吉田松陰伝』と題する日本人・イギリスの文豪スティーヴンソンがなぜ（祥伝社）という本を書いたこと。こうした不思議な縁のつながりで、3人の王子にも、この言葉にも出会いました」

なるほど、「不思議な縁のつながり」なら、だれにもある経験かもしれない。周りの人に尋ねてみよう。「あなたのセレンディピティは」

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年4月14日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

DEN構想

「中国やインドの歴史的な台頭に日本が立ち向かうには、北米自由貿易協定（NAFTA）に日本が加わるべきです」。先ごろ来日した米経済戦略研究所のクライド・プレストウィッツ所長がこんな提言を残していた。

同氏の近著「東西逆転 アジア・30億人の資本主義者たち」（NHK出版）のなかでも論じている。共通の価値観や安条条約で結ばれた日本が連携すれば、さらなる経済成長が期待できるとしているのだ。

その一方、米国は膨大な経常赤字を抱えるため、遠からずドルの急落は避けられないと見る。巨額のドル資産を持つ日本がその被害を小さくするには、米国と同じ経済圏に飛び込むのが最善だというわけだ。

「円とドルが合体すれば、影響はもっと軽減できます。著書では円のドル化と書きましたが、日米の共通通貨「DEN」をつくるのはいかがですか」と、さらに大胆なアイデアまで飛び出した。

かつて日米貿易摩擦が激しかったころ、日本が米国の1州になれば問題解決という意見があった。ドルと円のつづりをつないだDEN構想は、その通貨版といったところだ。「とても実現できるとは思えませんが」と応じたら、「しかし、このまま米国が経常赤字を為替で解消すると、ドルの下落幅は50%以上になる」と答えた。

極論かもしれないが、中国やインドの興隆も米国の赤字水準も未知の領域に入っている。一つの警告と受け止め、方策を考え

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年4月3日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

相利共生

在日米国商工会議所（ACCJ）のチャールズ・レイク会頭（アメリカンファミリー生命副会長）が「相利共生」という言葉を今年のスローガンに掲げている。

同会議所が日本語を採用するのは初めてで、その「日米の経済界が共に発展することへの期待を込めた」という。英語で「Working Together, Winning Together（共に働き、共に勝ち）」と表現した。

もともとは、アメリカンファミリーの松井秀文会長から教わった言葉だそう。顧客や代理店、社員などの協力と協調の大切さを伝える趣旨の標語だったという。

ACCJというと、日本市場の開放を求める圧力団体という印象が強い。日本の規制緩和や輸入障壁の撤廃を求めるという役回りが多かったからだ。この標語は、そんなイメージを吹き払う狙いもある。

「製菓の認可に時間がかかるなど、日本に求めたいものはまだありますが、ACCJが求めるものは日本の消費者の利益、そして日本全体のためにもなるということを示していきたい」と言う。

「相利共生」の具体的な柱は「企業の社会的責任の推進」と「改革の応援」。日本社会への貢献を促すとともに、「日本政府が独自の判断で実行しているさまざまな構造改革を支持していく」という。

日米貿易摩擦が激しかったころ、米通商代表部のタフな日本担当として喝らした。日本滞在も7年になり、ソフトな米国の顔も板に付いてきたようだ。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年2月17日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

ブッシュ大統領にまた難題

ブッシュ米政権のナンバー2、チェイニー副大統領が、先週末に起きた誤射事件をめぐって集中砲火を浴びている。

批判の焦点は、副大統領が情報を出し渋ったことだ。テキサス州の農場で狩猟中、獲物のウズラと間違えて友人を撃った事故が明らかになったのは、発生から丸一日たってからだ。

その後、「安定している」と伝えられた友人の容体が悪化したのに、大統領報道官はそれを知らされていなかった。大統領と副大統領との情報伝達もうまくいっていないことが明らかになってしまった。

沈黙を守っていた副大統領は4日後にやっと口を開いたが、その場は記者会見ではなく、ブッシュ政権に好意的といわれる保守系のテレビ局、FOXニュースだった。事件を最初に報じたのが狩猟場の農場主が連絡した小さな地元紙だったこともあり、ほかの米メディアは「事件を小さく扱おうとした」と疑っている。

メディアが引き合いに出しているのは、初代財務長官ハミルトンが退任後、決闘で撃たれて死亡した約200年前の事件。銃社会の米国でも、閣僚がからんだ銃事件は珍しい。そのうえに「情報操作」の気配があるのだから、ワシントンの記者たちがこそとばかり、事件を追いかけけるのも無理はない。

一部には副大統領の辞任を求める声があがっている。イラク問題やガソリン価格の高騰で人気低迷のブッシュ大統領にまた頭痛の種が増えた。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2006年1月12日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

黒字が日本経済を殺す

クレジットカードで借金をしながら、消費を奨励する米国人の生活そのままだに、米国の経常収支の赤字は巨額の貿易赤字を背景に拡大し続けている。

ほかの国ならとくに借金取りがドルで回収しに来るのでドル不足に陥る。ところが、米国は基軸通貨国なので、ドルを刷れば事足りる。それでもドルが嫌われるようなら、金利を上げて「強いドル」だと言いつのれば世界からお金は入ってくる。

企業の格付け会社を主宰する三國陽夫さんの新著「黒字亡国——対米黒字が日本経済を殺す」(文春新書)を読んだら、日本がデフレから脱しきれないのも、この構図にはまりこんでいるからだという。

「輸出で稼いだ黒字を日本がドルでアメリカに預け、日本の利益ではなく、アメリカの利益に貢献している限り、円高圧力もデフレ圧力も弱まることなく、政府・日銀がいくら財政支出や金融緩和というデフレ解消策を講じても、一向に持続性のある効果は現れないのである」

こうした先例が植民地時代のインドだったという。宗主国の英国がインドからの輸入で生活を豊かにする一方、インドに支払われたポンドは英国に預金され、英国は経済成長を謳歌したが、インドは慢性的なデフレに苦しんだという。

貿易で稼いだドルは貯めずに使っ。これが「亡国」を避ける道ということになるが、ドルの蓄えがないと不安だという政府の心理は、貯金を減らしたくない個人と似て、変わりそうにない。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞 2005年11月30日 夕刊 2ページ 東京本社



論説委員室から

いなか暮らしのコツ

月山(つきやま)のふもと山形県西川町の大井沢という地区を訪ねた。邊境に懐かしさは、ほかの山間地と同じだが、ちょっとうれいしいのは「よきもの」の定住者がふえたこと。110戸のうち10戸はそうだった。

この地区にある民家ギャラリー「麦わら」で、そうした新住民の人たちから定住のコツを聞いた。

ギャラリーを営む田作政司さん(46)と悦子さん(43)の夫婦も新住民だ。政司さんはソーセージ作りも手がけ、仕事を通じて地域に根を下ろしてきた。

山登りが好きで、「月山を歩くうちに住み着いてしまった」という定住4年目の横山皓一さん(43)は「いいところばかりを見ること」と笑った。

月山和紙をすいている三浦一之さん(54)は、埼玉の和紙工房から移って10年ほどになる。「地域の仕事をいろいろと引き受けることが大事」という。祭りから消防団まで、新住民は地区に不可欠の存在だ。

ここで「元気を創る会」を運営する町職員志田龍太郎さん(46)は旧住民。「互いのちょっとした妥協で、新旧の人々が仲良く暮らせる」と言う。

山形市に住む作家で、西川町に住んだこともある高橋義夫さん(60)は「郡会で暮らす能力がないと、いなかでもうまく暮らせないよ」。辛辣だが親切な助言だ。

これから「団塊の世代」がリタイアする時代を迎える。いなか暮らしをめざす人たちは、こうした先進地域の先達のアドバイスが役立つのでは。

〈高成田亨〉

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。



論説委員室から

「戦陣訓」の呪縛

第2次世界大戦で、多くの日本兵が「生きて虜囚の辱を受けず」という「戦陣訓」のもとで、「玉碎」や「自決」の道を選んだ。しかし、はからずも捕虜になった日本兵も、またこの規範から逃れることができず、心に深い傷を負った。

米国の研究者、ウルリック・ストラウスさんの近著「戦陣訓の呪縛——捕虜たちの太平洋戦争」（吹浦忠正監訳、中央公論新社）は、捕虜になった日本兵たちの記録や証言をていねいに集めて、その事態を明らかにしている。

ストラウスさんは、日本勤めの経験がある国務省OBだ。朝日新聞の「声」欄で捕虜だった人に証言を呼びかけたところ、80人余が応えた。米国勤務の折にミシガン州の著者の自宅にうかがい、日本からの手紙や米軍の尋問記録などを見せてもらったことがある。

完成した本を読むと、捕らわれた兵士たちの混乱ぶりがわかる。捕虜についての知識や準備がないために、収容所で親切にされて驚いたり、それでも反乱を企てたり。戦後復員しても、不名誉だと思いつき故郷に戻れない人もいた。まさに呪縛である。

「戦陣訓」は日米開戦の年、東条英機陸相（当時）が出したが、こうした考え方は以前からあり、それを「再確認」したものだという。そのせいか、「戦陣訓」がなくなった今でも、結果よりも精神を重視して「玉碎」をいとわない風土は、政治にも外交にも企業社会にも根強く残っているように思う。

〈高成田亨〉